

時專新報

國民の感情

一個人の間に於ける感情は雲霧の眼を過ぐるが如し一
時は容易に解く可らざる確執も多少の時日を経れば自
然に忘るゝのみならず一夕の會合 杯酒の間に積年の
怨を消して劍戟の交を結びたるの讎もなきに非ず或は
執念甚だ深くして容易に忘れざるも人間の一生は僅々
五六十年来にして三寸息絶えて萬事休するときは其執念
も北地一片の烟と共に散するのみなれども國と國との
關係は全く之を異にして一たび國民の心に銘じたる感
情は之を子々孫々に傳へて永久に忘るゝものとなく長歳
月の間に自から益々消長の變れども一旦の機會に
必ず之を發するの常にして古代の歴史に九世の國譽を
報するの誠の如き其一例にして決して珍らしからず
蓋し人は一代の人にして國は千年の國なり一代の怨は
一代にして消すれども千年の情は千年にして忘るゝみ
と能はざればなり之を日本古來の事實に徴するに彼の
元寇來侵の一事の如き當時執權者の決斷を我將士の忠
勇に加之るに不慮の天幸を以てして我國土を汚さ
るゝに至らずして止みたれども海賊土寇の類なれば鬼
も角も儼然たる一國の主權者が謂はれれどもなきに非常
の大軍を出し我國に向て敢て呑噬を逞みせんを試みたる
其無禮至極の舉動は日本國人の心に記して決して忘る
ゝこと能はざる所のものなり其後足利の時代には明國
と交通して互に禮意を交換し當時の怨恨は全く消散し
たるものゝ如くなりしかども足利を距り織田を経て豊
太閤の一統に及び遂に朝鮮征伐の舉あり豊公の征韓
は如何なる意志に出でたるや知る可らずと雖も其兵を
出すの前、使者を朝鮮に遣はして今度明國の罪を問ふ
に當り路を貴國に借りたさに付ては貴國は宜しく我が
爲めに先導を爲す可しとの旨を申込みたるに彼は之に
對して異議を唱へしかば使者は聲を擧ぎして在昔元軍
の我邊境を侵すや之が手引を爲したるものば實に朝鮮
なり若し我命に従て先導を爲さずんば今回の舉亦
必ず汝の罪を糾する可らずとて大に彼を叱したる
ふとあり使者の一言必ずしも豊公の命令に非ざる可
しと雖も時に臨んで忽ち元寇の事に及す我國人が其
一事を感ずるゝも能はざる證據にして朝鮮征伐の一事
亦決して偶然に非ざるを知る可し又近來の事を云へば
毎度述べたる所なれども今度の日清戰爭は昨年東學黨
の亂事事件より朝鮮國事の改革問題に付し兩國の間に
意見と異にして遂に事の及びたるものなり單に此
始末より見るるときは戰等の端は偶然に發したるが如く
なれども決して然らず明治七年日本が朝鮮の開國を促
して通商條約を結びたるより以來、朝鮮に於ける日清
兩國の關係或行を仔細に觀察して支那が朝鮮所屬云々
と口實とし隨に其内事に干渉して間接に日本を辱
しめたる事實は如何、朝鮮の出來事に付し我國は支那
に對して過度保護の地位に立ち年來の幸甚經營を空し
く水泡に歸せしめたる始末は如何、然かのみならず使
本兵が長崎に於て亂暴を働きたるが如き又我保護の
責に在る金玉均が上海の宴會に於て刺殺せられたるの
如き事等は皆朝鮮に對して我國が保護を以て朝鮮に
對するべき如き情勢に對し我が國民が如何に感ずるゝ
ことなるに二十年来の間に幾ら心を一々に傾けて來り
よるべきに日清の交際が昨年宣戰の當日までは表面に

だ美しくして一點の波瀾を見ざりしと雖も戰爭の原因
は一朝一夕の事に非ず久しき以前より胎し來りて一
旦の機會に爆發したるの事實を知るに難からざる可し
左れば一般の國民が一たび心に銘じたる感情は苟も其
國の存在する限り決して忘るゝこと能はざるものにし
て年月の長短は更も角も機會到來すれば早晚必ず發せ
ざるを得ず但し之を發するの機會は甚だ微妙にして成
は晴天の霹靂、人の意外に出るゝもあり或は外より
見れば機會既に熟するが如くにして容易に發せざるゝ
とあり其間の機微消息は玄之又玄聞く可らず語る可ら
ず以て心傳心たゞ銘々の心に合點して靜に待つ所ある可
きのみ我輩は此一段に至りて佛國人民の舉動に感服す
るものなり千八百七十年獨佛の戰爭に佛國は獨逸の爲
めに破られて國王親から敵陣に降服し五十億圓の金
を拂て平和の局を結びたるは非常の屈辱なりと云
ふ可し爾來佛人は一意専心銘々の業を勵みて勢力の回
復に勉めたるの結果、五十億圓の金は數年の間に償還し
盡したるのみならず商工業の繁昌は戰争の以前にも
増して國運隆々旭日の昇るが如く今日に至りては軍備
の如きも獨逸に比して寧ろ一等を優るの有様なりと云
ふ普通の考を以てすれば既に斯る勢力を蓄へ得たる上
は何れ何れ直に獨逸と戰ふて積年の怨を報ふるゝと
自然の順序ならんと思はれるれども彼等は二十年来念
々敵愾の情を忘れざるにも拘はらず容易に復讐の手段
に出でずして時として却て敵を友視し現に今回我國
に對する三國同盟などには其敵國と手を携へて事を共
にしたるが如き其心事頗る解す可らざるに似たれども
在處佛人の大に畏る可き所にして敵國たる獨逸の憲
法思想可きなり吾々日本人は佛國の國民に非ず一たび
心に銘じたるものは永久忘れずして必ず發するの日の
來りしと雖も其れを發するや漫に小事に發せず大に
力を蓄へて大に發するの機會を待つゝと佛國人の如く
にして他の心算をして大に害からしめんゝと我輩の切
に希望する所なり

報新

戰地死亡者

- 在戰地陣亡者左の如し
同縣同郡村 佐藤松三郎
同縣同郡村 岸本松次郎
同縣同郡村 岸本實作
同縣同郡村 岩野 平作
同縣同郡村 孫吉
同縣同郡村 池田金次郎
同縣同郡村 三
同縣同郡村 小林次郎
同縣同郡村 岡村作太郎
同縣同郡村 小林庄次郎
同縣同郡村 高木榮次郎
同縣同郡村 廣田 秋弘
同縣同郡村 市助
同縣同郡村 吉澤 宇之
同縣同郡村 神崎 鶴吉
同縣同郡村 矢後吉次郎

臺灣紀行 (第二信)

六月八日於京師九 特派員 宮本芳之助
中品の乗込
車馬、風氣、要點々々、里餘の長堤端々として絶え
ざるも、唯の如しれ臺灣の途に上る島南男兒の一
群六月七日廣島より正午十二時を期し字品港に赴くも
の蓋字形の紀章金色なるは高等官にして老壯者多し銀
色なるは判任官以下にして年少氣鋭の徒是れ文官官
り聞説獨語獨語、書生豈可し事、文章、とて維新前後
の言、今年北清征韓の事終りて新に版圖を南海に得た
り此時に當り文章を掲げて南海に渡るも決して徒然に
あらざるなり友人數名に投られて字品に到れば幾多の
汽船港内に林立し埠頭近傍には萬里雄健の勇士龍装し
て歸々たる名譽を懸肩に擔ふて候する、是れも亦本
土、港頭一面は陸軍の御用地となり出入の際には
私用者、兵一々召れ支那兵、支那兵、支那兵、支那兵、支那兵
り臺灣行の一同は長沼、吉川兩支店の間に横光し乘船

の時間を待受け
乗船に着手
運糧指揮官後藤
を定め人夫の手
掲げたり
乗船の際には
又飲食物の事は
とありて新聞記
イザ乗船となる
を幸ひためめ
の甲斐なし、熱
熱せるといふ
京師九は千八百
ル商會に於て
エスデルと稱
三二にして門
る久しく掃除
に絶えたり船
たるものにて
三十九呎、深
つ安心と云ふ
判任待遇九十
二十名、留及
丁三十名都合二
士官五六名便
を解さしは夕
嶋の山影、字品
で吾々の行と
岡氏橋頭に立
の涙敢て離別
なからん哉
船中
當日は乗組員
空腹を告げた
り早く開けば
劇助
七日の夜は安
にかゝるや船
に備へて不
不慣れな船
ければ船員
轉を試みたる
門前
無事に門前へ
石炭積取
改正